

たたらの技を今に

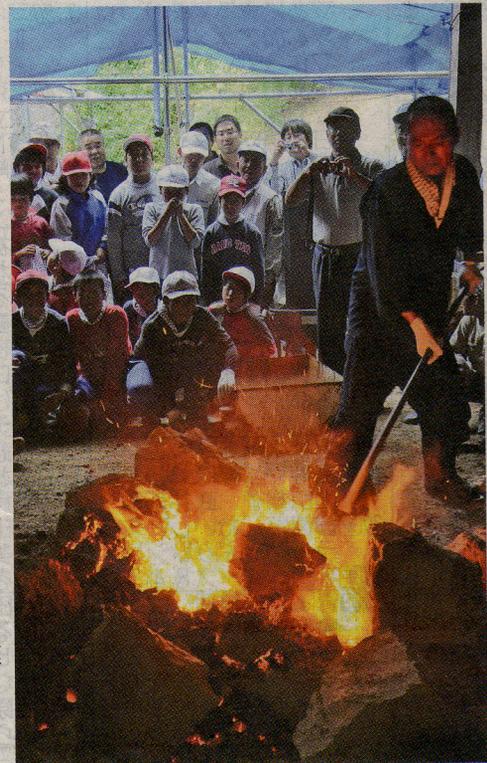
灼熱の炉 苦勞実感

一関・大東 大原小児童が製鉄実習

一関市立大原小学校(横沢榮子校長、児童168人)の児童が14日、同市大東町大原の砂鉄川上流部にある「たたら製鉄学習館」でたたら製鉄の実習を行った。郷土の歴史や文化を学ぶと、5年生が総合学習の一環で続けている取り組み。地域の人たちに教わりながら粘土で造った溶鉱炉で鉄作りに励み、灼熱の炉の中から姿を現した真っ赤な鉄の塊に歓声を上げた。

実習には5年生37人と教職員が参加。たたら製鉄の実践や調査・研究を続けている地元有志らのグループ「ホッパの会」の会員の指導を受けながら作業を進めた。溶鉱炉は粘土を積み上げて造った大小の2基を準備。子供たちは早朝に火を入れ、暖めていた炉の中に10分置きに木炭と砂鉄を入れたり、投入量をチェックしたりする作業を分担して行った。

砂鉄投入量は2基の炉とも約30キ。火入れから約6時間30分後に解体したところ、小型の炉は工程上のトラブルもありうまく鉄ができなかったものの、大型の炉からは真



児童がかたずをのんで見守る中、鉄作りの指導に当たった関係者が解体した炉の中から鉄の塊を取り出した



たたら製鉄の実習で炎が立ち上る溶鉱炉に木炭を入れる大原小の児童

つ赤に焼けた良質の玉鋼を含む約8キのケラ(素鋼鉄)が姿を現した。旧内野小時代から鉄作りの実習に参加している同会の会員で刀匠の菅原平さん(92) 同町大原字下鳥神は「ますますの出来」と満足げな表情で話していた。

内野小時代に鉄作りの経験がある小野寺龍二君は「前もやったことがあるけど、今年もいい鉄ができました」と感想。初体験の中津山剛君は「とても面白かった。炉が熱くて砂鉄を入れるのが難しかった」と昔の鉄作りの苦勞を感じ取っていた。

たたら製鉄の実習は統合前の旧内野小児童が総

合学習の一環で1999年から取り組み、2010年に開校した大原小も実習を継続している。